『事が起こったときに…』ヨハネ14:25-31

14:25 これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったことである。
14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。
14:27 わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。
14:28 『わたしは去って行くが、またあなたがたのところに帰って来る』と、わたしが言ったのを、あなたがたは聞いている。もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう。父がわたしより大きいかたであるからである。
14:29 今わたしは、そのことが起らない先にあなたがたに語った。それは、事が起った時にあなたがたが信じるためである。
14:30 わたしはもはや、あなたがたに、多くを語るまい。この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない。
14:31 しかし、わたしが父を愛していることを世が知るように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである。立て。さあ、ここから出かけて行こう。

●序論
ヨーロッパで奉仕する一人の日本人牧師のお話。数年続くロシアのウクライナ侵攻に伴う緊迫感について。
そういう国際政治や国連でも止められない現実を見ている中で、ウクライナの中では信仰復興ような事が起こっていて、キリストを待ち望むこと、キリストしか成し遂げられない平和に、改めて人々の関心が向けられている…と話す。
そしてそんな中日本に帰ってきて感じるのは、その危機意識のギャップ（差）だと言われていました。教会も同様だというふうに。

１３章から始まる、わたしたちから見るならば、イエス様の告別メッセージ」。けれども当時の弟子たちは、言われながらもどこか実感がなく、その危機感や緊迫感のない様子。そこにギャップが有ることがわかります。
その現場で、そういう弟子たちとお話になっているイエス様ご自身が、一番それをよく感じ、わかっておられました。だからイエス様のお言葉にはその不理解のギャップを覆う、言葉と響きがあるのです。

14:25 これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったことである。
…
14:29 今わたしは、そのことが起らない先にあなたがたに語った。それは、事が起った時にあなたがたが信じるためである。

イエスさまが、そんな弟子たちやわたしたちをだれよりもよく知り、時間をかけ「ことが起こったときにあなたがたが信じるために」と、丁寧に語り続けてくださってい

ることがわかるのです。

●本論
Ⅰ．聖霊が変えてくださる
「ことが起こったとき」それは、この数時間後にイエスさまが経験する十字架に至る受難の出来事です。

ただそれは、とても良い人が不当に裁かれて死なれた、なんて不憫でかわいそうな物語なのだ…と歴史上に語り継がれた、それがイエスさまの物語ではありません。そのあとにイエスさまは三日目によみがえられた。だからすごい人だ！という物語の伝承でも実際にはありません。

あのペンテコステの日、そこで聖霊の経験をした弟子たちは大きく変えられました。
大胆に立ち上がり、そして人々の前でイエスがキリスト救い主であることを、大胆に宣言していったのです。
使徒2:36 だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」。

これは、それを聞く人たちの心を震わせ、悔い改めに導き、その日三千人ほどの人がイエスを主と告白して救われていったとあるのです。
あの弱い弟子たちを変えたお方それが聖霊さまです。イエスさまが言われた通りです。
14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。
言い換えると、
-聖霊は、わたしたちにすべてのことを教えてくださる。
-聖霊は、イエスさまが話してくださっっていたことを思い起こさせてくださる。

イエスさまが言われるとおり、聖霊が、彼らにすべてのことを教え、また語られていたことをことごとく思い起こさせてくださり、彼らは、その後教会を建て上げていったのです。
聖霊満たされると聖書を超えた突拍子もないことを語り、やりだした…のではない。イエスさまの言葉への気づきと諭しが与えられていくということです。

Ⅱ．主の平安が与えられる
14:27 わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。
聖書により、この個所の言葉を「平和」とも「平安」とも訳しています。

人は自分が何かを持っていることで安心したり、持っていないことで不安を感じることがある。安心を得るため、人から奪ってでも…というところに、争いが生まれます。

今日はアドベント、イエスさまの誕生をめぐって、…
ユダヤ人の王、救い主がお生まれになった…という言葉は、ヘロデ王とその周囲そして、エルサレムの人々の耳にも入りました。
普通に童話などで見る物語なら、そのお誕生をみんなが喜んだ…となりそうですが、
マタイ2:3 ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。
救い主キリストを迎えることで何かが変わる、変えられてしまう。自分の持っているものが取り去られるかもしれない。…。
彼らにとって、それは大きな不安となったのです。ましてやヘロデ王は、王位を奪われるのでは…との不安から、ベツレヘムとその付近の2歳以下の子どもたちをことごとく殺したと記録されています。

キリストのこの福音を聞いた誰もが、すぐＯＫと言えたのではなく、不安を感じる人はいます。あのマリヤも、そしてとくにヨセフはも動揺することはありました。
けれども彼らは、そこで神を仰ぎ、神を信じることを選んだのです。

信仰は、イエス・キリストを信頼して、自分のすべてをお渡しして、そうして祝福していただくこと、そうして変えていただくことです。
先ほど、あるヨーロッパで牧会されている先生のお話にもありましたが、キリストによってしか見いだせない平和、そういう平安をわたしたち知る者となりたい。それこそ、「御言葉を経験する」という今年の標語そのものです。

Ⅲ．世の支配者に打ち勝つ存在を見る
…つまりそれがイエス・キリストです。

実際に、当時イエスさまは、この世の権力者たち、ユダヤ人の指導者・律法学者・祭司長たちにとらえられて行きました。
しかし、そのことを通してキリストの十字架の死と復活、福音の完成がなされていったのです。

イエス・キリストばかりか信仰者たちの信仰を奪い取ることはできない、それはこの福音書と使徒の物語、また今日に至るまでのクリスチャンの歴史が証明するところです。
先ほども引用したペテロの説教の一節を繰り返します。
使徒2:36 だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」。

かつてキリスト教会は、その歴史の中で、ある意味”この世の支配者”そのものになろうとする過ちを犯していた時代がありました。
それを間違っていると宣言したことに始まる運動が、あの宗教改革でした。
聖書のみに立ち返る。ただイエスのみだ。ただ神の恵みにより、信仰によって救われるのだと、聖書の語る福音を明らかにしてたちあがった、教会回復運動という歴史を知ることができるのは幸いです。
まさに、「…聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(:26)とある通りです。
そしてそれは当時、この世に対しては、命がけの信仰の行動であったのです。

●おわりに

14:31 しかし、わたしが父を愛していることを世が知るように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである。立て。さあ、ここから出かけて行こう。

イエスさまの決意の言葉の響きがここにあります。
ここでもあるのは、人々がイエスさまを本当の意味で知ることができるように、ということ、わたしたちのためにすべてを捨てて十字架へと向かわれるありさまです。

それがすなわち「わたしが父を愛していることを世が知るように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである」ということです。。
これからあなたたちが見る、わたしが受ける受難のすべては、わたしが父なる神を愛し、その思いに沿った歩みなのだと示すのです。

最初のところに戻って、ここでの「立て。さあ、ここから出かけて行こう」という呼びかけもまた、まだイエスさまの言葉を理解できないでぽかんとしている弟子たちを覆う、イエスさまの言葉です。
今わからないからダメ、と見放さず、わからないでいる人たちをも連れ出してくださり、彼らを十字架の証人、復活の勝利の証人ともしてくださっているのです。

今日の御言葉から問われることを見ておきましょう。
今日、わたしたちはどれほど聖霊に教えられやすい人となっているでしょうか？
そして、イエスさまの平安をどれほど必要としているでしょうか？
そうして、イエスさまが「立て、さあここから出ていこう」と言われる言葉に、素直に応答できるものでしょうか。

今日聞いているすべての言葉が、わたしたちを捨て去る言葉ではなく、わたしたちを拾上げ、やさしくおおい、また導こうとしてくださっているイエスさまの言葉とうけとめることができるなら感謝です。
「こと」つまり、十字架の出来事がすべて、わたしの救いのためと信じる者としてくださる恵みがその言葉に込められているからです。